

経理担当者ならスマートに 使いこなしたい

CSV活用術 ① ～発展編～

経理ソフトなどのシステム間連携によく用いられるCSVファイル。上手に活用すれば、大幅な業務効率化が望めます。そこで、経理担当者が使いこなしたいCSVの活用術を3回にわたって解説します。今回は、ExcelでCSVファイルを読み込む実例と運用のコツを紹介します。

羽毛田睦土公認会計士・税理士事務所 所長
公認会計士・税理士

羽毛田 睦土

9月号 ▶ ① CSVファイルの基本と作成・読み込みの際の注意点

10月号 ▶ ② ExcelでCSVデータを作成する実例と運用のコツ

11月号 ▶ ③ ExcelでCSVデータを読み込む実例と運用のコツ

CSVファイルエクスポ ートの基礎知識

今回は、CSVファイルのエク
スポートの使いどころや、データ
を加工するコツを紹介します。

(1) CSVファイルをエクスポ ートする利用例

業務システムのデータをほかの
業務システムで活用したいときに
は、CSVファイルをエクスポー
トしましょう。具体的には、**図表**
1のような業務が考えられます。

(2) エクスポートす るデータの選び方

① 必要な情報を確 認する

たとえば、販管シ
ステムから売上デー
タをエクスポートす
る場合に、売上明細
と取引先別売上高推
移表の2つの形式が
考えられます。この
ような場合には、ど
ちらのデータをエク
スポートするかを選
ぶ必要があります。
まずは、必要な
データが含まれてい
るか確認しましょう。

たとえば1日ごとの売上高を集
計したいのであれば、エクスポー
トするデータに売上日の情報が必
要です。取引先別売上高推移表に
は売上日の情報はないため、売上
明細をエクスポートします。

② データの詳細度

次に、データの詳細度やデータ
の形式に着目して、処理しやすい
データを検討します(**図表2**)。

通常、明細データのほうが集計
データよりもデータ量が多くなり
ます。データ量が多すぎる場合に

■図表1 CSVファイルのエクスポートの活用例

〈ほかのシステムにデータをインポートするための元データとして使う〉

- ・銀行の入出金データをエクスポートして、会計システムに仕訳を計上する
- ・販管システムから売上データをエクスポートして、会計システムに仕訳を計上する
- ・給与計算システムから給与データをエクスポートして、会計システムに仕訳を計上する
- ・会計システムから年度末残高データをエクスポートして、税務申告システムの勘定科目内訳書を作成する

〈業務システムでは作成できないレポートをExcelなどでつくるための元データとして使う〉

- ・販管システムから売上データをエクスポートして、売上の分析資料をつくる
- ・給与計算システムから給与データをエクスポートして、給与の分析資料をつくる
- ・会計システムから月次決算書データをエクスポートして、月次報告書等の分析資料をつくる
- ・会計システムから仕訳データをエクスポートして、売上高・経費・月次報告書その他の分析資料をつくる

③ データの形式

データの形式については、1行
1件形式のデータと、それ以外の
形式(以下、「雑データ」と呼び
ます)に分けて考えましょう。

1行1件形式のデータは、文字

■図表2 エクスポートするデータとデータ形式

業務システム	エクスポートするデータ	データの詳細度	データ形式
販売管理システム	取引先一覧	明細	1行1件形式
	売上明細	明細	1行1件形式
	取引先別売上高推移表	集計	雑データ
給与計算システム	従業員一覧表	明細	1行1件形式
	給与明細	明細	雑データ
会計システム	総勘定元帳	明細	1行1件形式
	仕訳帳	明細	雑データ
	月次残高推移表	集計	雑データ

どおり1行に1件のデータが入力されている形式です。この形式のデータなら、ほとんどの表をある程度効率的に作成できます。

一方、雑データは、レイアウトが似た表への加工は簡単ですが、それ以外の表に加工するのは非常に大変です。目的の表が雑データから簡単につくれる場合には雑データを、難しければ1行1件形式

■図表3 給与明細の形式

〈通常の給与明細〉

年月	氏名	基本給	交通費	社会保険料	所得税	差引支給額
202409	桑原 達樹	260,000	4,920	33,760	7,920	223,240

〈1行1件形式の給与明細〉

年月	氏名	区分	金額
202409	桑原 達樹	基本給	260,000
202409	桑原 達樹	交通費	4,920
202409	桑原 達樹	社会保険料	-33,760
202409	桑原 達樹	所得税	-7,920

式のデータを選んでください。

(3) **明細データは必ずしも1行1件形式のデータではないことに注意**

1行1件形式のデータとは何か、具体例をみてみましょう。

① 給与計算システムの給与明細データ

給与計算システムからエクスポートする給与明細のデータは、

支給日、氏名、基本給など各種項目が横に並んだ形式で出力されることが多いです(図表3上)。これは、雑データなので、元データとして使うと、加工作業の時間が増えがちです。

ちなみに給与明細を1行1件形式で表わすと、図表3下のようになります。ただし、このような様式はエクスポートデータとして一般的ではありません。

② 会計システムの仕訳データ

会計システムから仕訳データをエクスポートする手段としては、大きく分けて仕訳帳・総勘定元帳・月次残高推移表の3つが考えられます。一般的な会計ソフトでは、次図表4のようなレイアウトで出力されることが多いです。

この3つのうち、月次残高推移表は集計データ、仕訳帳と総勘定元帳が明細データに分類され、総勘定元帳だけが1行1件形式のデータに該当します。

仕訳データの場合、「1行1件」の「1件」は、1つの仕訳全体を指すのではなく、1つの仕訳明細(仕訳のなかの1組の勘定科目と金額)を指します。つまり、1行1件形式というのは、1行ごとに1つの仕訳明細が入力された状態

を指します。

この観点からは、総勘定元帳は、(期首残高行を除けば)1行1件形式です。一方で、仕訳帳は1行に仕訳明細が2件入った雑データです。ですから、仕訳帳よりも総勘定元帳を元データとして使ったほうが集計の手間を減らせることが多いです。

なお、総勘定元帳と仕訳帳では、出力されるデータの内容が異なる場合もあるので注意が必要です。

たとえば、会計ソフトによつては、総勘定元帳では消費税を分離して仮払・仮受消費税勘定を使った仕訳が出力されますが、仕訳帳では消費税分離前のデータが出力されます。消費税分離前のデータが欲しければ、総勘定元帳ではなく仕訳帳を使うことになります。

1行1件形式のデータを集計してレポートをつくる

例として、総勘定元帳から商品別に売上高、仕入高、利益のレポートを作成します(35ページ図表5)。

(1) **集計したい数値を1列にまとめる**

まず集計したい数値を1列にまとめます。たとえば、総勘定元帳

■図表4 会計システムからエクスポートした仕訳データの例
〈仕訳帳〉

日付	勘定科目	金額	勘定科目	金額
2024/1/5	外注費	15,000	普通預金	15,000
2024/3/15	売掛金	100,000	売上高	100,000

〈総勘定元帳〉

区分	勘定科目	日付	借方金額	貸方金額	相手科目	残高
期首残高	普通預金					500,000
明細	普通預金	2024/01/15		15,000	外注費	485,000
期首残高	売掛金					0
明細	売掛金	2024/03/15	100,000		売上高	100,000
期首残高	資本金					500,000
明細	売上高	2024/03/15		100,000	売掛金	100,000
明細	外注費	2024/01/05	15,000		普通預金	15,000

〈月次残高推移表〉

		期首残高	2024/1	2024/2	2024/3	期末残高
貸借対照表	普通預金	500,000	485,000	485,000	485,000	485,000
貸借対照表	売掛金	0	0	0	100,000	100,000
貸借対照表	資本金	500,000	500,000	500,000	500,000	500,000
貸借対照表	利益剰余金	0	-15,000	-15,000	85,000	85,000
損益計算書	売上高		0	0	100,000	100,000
損益計算書	外注費		15,000	0	0	15,000

では、借方と貸方に分かれて金額が表示されています。この2列どちらかをプラス、どちらかをマイナスの値として集計すると、簡単に集計ができます。

今回の例では、借方金額をプラス、貸方金額をマイナスの値として集計するため、「借方金額」(C列)から「貸方金額」(D列)を引いて「差引金額」(G列)を計

算しています(図表5①)。

(2) 必要に応じて集計の条件に使う列をつくる

次に、各行の金額をどの区分に集計するかを指定する列を準備しましょう。

今回の例では、摘要の先頭に入力された商品名の情報を使うので、「摘要」(F列)の先頭3文字を抜き出して「商品名」(H列)

に入れています(図表5②)。

(3) SUMIFS関数で集計する

ここまで準備ができたなら、SUMIFS関数(複数の条件に一致する数値を合計する関数)を使って集計します(図表5③④⑤)。

利益はSUM関数で計算しています(図表5③④⑤)。

方法を工夫しないと、作業効率が大いに悪化する場合があります。

(1) 同じ内容の取引は同じ方法でデータを入力する

同じ内容の取引について、入力方法を統一しておきましょう。

会計システムであれば、同じ内容の取引について仕訳の入力方法を統一しておきましょう。そうすることで、仕訳に基づいて分析資料を作成する場合に、資料作成の難易度が大きく下がります。

(4) 最後に符号を調整する

今回の例では、総勘定元帳の借方をプラス、貸方をマイナスで集計しています。そのため、集計結果を見ると、売上高(K3セル)と利益(K5セル)がマイナス、仕入高(K4セル)がプラスで表示されます。

これでは見にくいので、すべて正の数値での表示に直します。売上高・利益に「1」を、仕入高に「1」を掛けるような数式を入力します(図表5④)。

ポイントは、すべての数値の計算をした後に、符号を調整することです。今回の例でも、いったん、符号を調整しない状態で集計した後に、符号を調整しています。

たとえば、「外注費」として1万1000円を支払う際に源泉所得税1021円を控除して普通預金から支払う取引」を記帳する場合、仕訳例1のどちらの起票方法でも、最終的な決算書の表示内容は変わりません。ただ、複数パターンの仕訳が混在すると仕訳パターンに基づく分析がしにくくなる場合もあります。できるだけ統一するようにしましょう。

(2) 分析しやすい形式でデータを入力する

会計ソフトによっては、仕訳の入力内容によって分析のしやすさが大きく変わる場合があります。

たとえば、ある会計ソフトでは、単純仕訳で入力する場合には相手勘定科目が適切に表示される一

CSVファイルをエクスポートする前提で記帳する

業務システムへのデータの入力

■図表5 総勘定元帳から商品別に売上高・仕入高・利益を集計する例

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
1	(総勘定元帳)								商品別集計 (符号調整前)					
2	勘定科目	日付	借方金額	貸方金額	残高	摘要	差引金額	商品名			A商品	B商品	符号	
3	売上高	2024/08/15		52,500	850,000	A商品_Z社	-52,500	A商品		売上高	-94,480	-58,460	-1	
4	売上高	2024/08/20		58,460	910,000	B商品_Z社	-58,460	B商品		仕入高	55,366	34,943	1	
5	売上高	2024/08/31		41,980	980,000	A商品_Y社	-41,980	A商品		利益	-39,114	-23,517	-1	
6	仕入高	2024/08/05	55,366		412,630	A商品_K社	55,366	A商品		商品別集計 (符号調整後) 売上高 94,480 58,460 仕入高 55,366 34,943 利益 39,114 23,517				④ =K3*\$N3
7	仕入高	2024/08/25	34,943		447,630	B商品_L社	34,943	B商品						
8														
9														
10														
11														

① =C3-D3

② =LEFT(F3,3)

③-1 =SUMIFS(\$G:\$G,\$A:\$A,\$J3,\$H:\$H,\$K\$2)

③-2 =SUM(K3:K4)

■仕訳例1 外注費発生時の2パターンの仕訳例

外注費 11,000 / 未払金 11,000	外注費 9,979 / 未払金 9,979
未払金 1,021 / 預り金 1,021	外注費 1,021 / 預り金 1,021

■仕訳例2 給料の仕訳を単純仕訳で入力する例

給料仮 157,000 / 普通預金 157,000	給料仮 157,000
給料 200,000 / 給料仮 200,000	給料 200,000
交通費 12,000 / 給料仮 12,000	交通費 12,000
給料仮 10,000 / 預り金 (源泉所得税) 10,000	給料仮 10,000
給料仮 30,000 / 預り金 (社会保険料) 30,000	給料仮 30,000
給料仮 15,000 / 預り金 (住民税) 15,000	給料仮 15,000

■仕訳例3 取消を貸借逆で起票する仕訳例

計上取引 : 売掛金 10,000 / 売上高 10,000	計上取引 : 売掛金 10,000 / 売上高 10,000
計上取引の取消し : 売上高 10,000 / 売掛金 10,000	計上取引の取消し : 売上高 10,000 / 売掛金 10,000

■仕訳例4 取消をマイナス金額で起票する仕訳例

計上取引 : 売掛金 10,000 / 売上高 10,000	計上取引 : 売掛金 10,000 / 売上高 10,000
計上取引の取消し : 売掛金 - 10,000 / 売上高 - 10,000	計上取引の取消し : 売掛金 - 10,000 / 売上高 - 10,000

■仕訳例5 売上計上を摘要欄に記載する仕訳例

計上取引 : 売掛金 10,000 / 売上高 10,000 摘要: 売上計上	計上取引 : 売掛金 10,000 / 売上高 10,000 摘要: 売上計上
計上取引の取消し : 売上高 10,000 / 売掛金 10,000 摘要: 売上計上	計上取引の取消し : 売上高 10,000 / 売掛金 10,000 摘要: 売上計上

方、複合仕訳で入力すると相手勘定科目が「諸口」と表示されてしまい、実質的に相手勘定科目の情報が使えなくなってしまう。

この場合、取引の類型ごとに専用の諸口勘定を準備して、すべての仕訳を単純仕訳で入力すると、集計時に相手勘定科目の情報を残します。

例として、「給料仮」の勘定科目を用いた給料の単純仕訳を示します (仕訳例2)。

この仕訳を入れた状態で普通預金の総勘定元帳を出力すると、相手科目列に「給料仮」と表示され、給料関連の仕訳であることがわかります。当然、給料仮勘定は、この6つの仕訳合算で0になるため、決算書への影響はありません。

このように単純仕訳で仕訳を入力することで、レポート作成時に集計で利用できる項目を実質的に増やせます。これは、会計ソフトの限られた項目を最大限活用する

ためには非常に有用です。

(3) 仕訳の取消しの入力・集計方法を検討する

仕訳を取り消すときに、単に貸借逆の仕訳を起票してしまうと、仕訳データの集計処理に不都合が出る場合もあります。

たとえば、売掛金勘定の総勘定元帳をエクスポートして、借方の明細は売上相当、貸方の明細は入金相当として分析したい場面を考えてみましょう。

このとき、売上計上仕訳の取消し仕訳を貸借逆に起票してしまうと、売上・入金の両方が実態よりも膨らんでしまう恐れがあります (仕訳例3)。

1つの方法として、会計システムが対応している場合には、仕訳の取消しをマイナス金額で入力する方法があります (仕訳例4)。

あるいは、仕訳の取消しは通常どおり入力する代わりに、集計時には借方か貸方かで集計せずに、補助科目や摘要など別の項目を使って集計する方法もあり得ます (仕訳例5)。

このように、会計ソフトの仕訳データをエクスポートして活用するためには、データの入力方法を統一しておくことが重要です。●